
注射禁止

雪芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

注射禁止

【著者名】

「」

「」

【作者名】

雪芳

雪芳

【あらすじ】

けしからん」とをする輩のせいで、今日も公園は大変。原案・ランデブーさん

「あつ、あつ、ああつ」と、いえば、喘ぎ声。

言葉にすれば単純明快極まりないものなのに、こざ耳にしてしまうと心中穏やかではなくなつてしまつのは何故なのだろうか。男は狭苦しい暗闇の中で悶悶としながら耳を手で覆つていた。

「ああつ……あ、ううん、あううん」

それでも、絶好調な女性独特の粘つこい声色は、簡単に男の指をすり抜けてしまう。鼓膜を弾き、いやんあはんと脳内を駆け巡る。そして脳内のあらゆるシナプスを刺激し、彼に様々なことを喚起させる。

田の前に女の豊満な体がある。
女は扇情的な瞳を濡らす。

淫靡に足を広げる。

そしてあの、喘ぎ声。

「あつ、ああん、もうだめつ、はあつ、ああんつ！」

堪らず、男は股間を握り締めた。

夢から覚めると、男が横たわる狭苦しい暗闇に、いくつかの光が差し込んでいた。どれほどの時間が過ぎたのか、耳を覆わなくともあの淫乱な呻きは聞こえない。かわりに、幼い子供たちがキャッキャと走り回る声や、それを窘める大人の声がする。

朝になつたのだ。もしかしたらもう、毎を過ぎていろかもしけな

い。

男はのつそりと上体だけ起こし、腹ばいのまま暗闇から光の世界へと顔を出した。眩しい太陽が男の茫然とした姿と匂いを浮かび上がらせる。髪で埋まつた顔、紙切れ同然の汚れきつた衣服、垢としよんべんが混じつた刺すような体臭。

欠伸で開いた口だけが目立つその姿は、茶色い蓑虫のよう。もしくは、家を背中にしょつてあるく例の軟体動物か。ダンボールハウスから飄々と体を出したホームレスは、巨大なカタツムリに見えるかもしけない。

ふいに視線を感じて、男は緩慢に首を右に傾けた。見やると、小さい子供がこちらを指差している。と、母親らしき人物がサッと子供の腕を掴んだ。そして訝しい視線を男に送るとそそくさと立ち去つてしまつた。

「朝になりや、俺の方が異物なんだよなあ」と、母親の立ち去る背中にぽつんと呟く。

見渡す周囲に広がるのは、健全で明るい公園だ。活動的な遊具、はしゃぐ子供たち、さわやかな立ち木、……そしてダンボールハウス(+)。これを異物といわず何を異物といおう。男にとつて、自身が異物じゃなく溶け込めるのは昼間ではなく夜、闇の中だけである。

しかしそれが最近、異物によつて侵されようとしている。

不況の煽りなのか、温かくなつてきたせいか、はたまたそういうプレイなのか。夜の公園で、えつちらおつちらと遊びに励む輩が増え始めたのである。モチロン遊びの内容はセックス、だ。

お陰で、それまで静かに過ごせた夜にも落ち着いていられなくなつてしまつた。昼間はテンションが高い子供たちのせいで、夜もテ

ンションが高い大人の子供たちのせいでの。

折角見つけた好条件立地だといふのに、これでは住むに住めない。しかも夜の子供たち、その勢力を絶好調拡大中なのだ。

「つたぐ、これじゃあ夜の異物があつちじゃなくつちになつちまつよ。……ん、異物？」

と、その時、ピンと考へが浮かんだ。

よくよく思へば、セックスに夢中になつてゐる人間とホームレス、戦闘能力が強いのはホームレスの方である。

武器として強烈な匂いもあるし、あつちはホームレスなんて触れたくもないはずだ。男自身、自分がくつちゃくて汚いくらい知つてゐる。なんたつてたまに自分の匂いで具合が悪くなる時があるので。

喘ぎ声が聞こえたらすぐダンボールハウスから飛び出し、彼らを追い掛け回せばきっと来なくなるだろ？

「なんたつてアツチはパンツも履いてないしな！」

男は意氣込むと、股間をぎゅっと握つた。

「ああ、ん、もつと、もつとおつ！」

と、いえば、喘ぎ声。

男は喘ぎ声を耳にすると、颯爽とダンボールハウスから飛び出した。

男の狙いはバツチリ。カツプルたちは突然あらわれたホームレスに悲鳴をあげると、パンツを残して去つていく。

面白いくらいに逃げていくので、男は次第に楽しくなってきた。ナマハゲのようにただ追いかけていくのではなく、趣向を凝らして、わざと物音を立ててから飛び出したり、絶頂時寸前に飛び出したり、奇声をあげながら飛び出してみたり。

「いっしん、もつと、もつと、ああ～あ～、…………ギャー…………！」

と、次々とガツナルたちは逃げていく。

普段は世間の目から逃れるように生きていることもあって、男はもうノリノリ、カップルを探して闇に目を光らせる。

……次の獲物がやつてきた。

「つてか、外でやんの？」

「じめんね、お金があんまりなくてね」

「もちろん、一円でいいんだろ」

茂みに隠れながら観察する。女子高生らしき女の子と、どこか野暮つたいサラリーマン風の男だ。どうやら援助交際らしい。

アリスの心は、既に彼の言ふ事に、何の感動も燃え移らぬ、死んでしまふ

物音をたて絶頂寸前に奇声をあげながら飛び出してやる！

女子高生は慣れた手つきでパンツを脱ぎ、足に絡めて落ちないようにすると、ぽんと尻を突き出した。勝手にやれば、といった様子か。勝手にやりますとも、といった風にサラリーマンは尻にむしゃぶりついた。男もまた、むしゃぶりつくなつて二人を覗き続ける。

やがて行為も佳境に近づいてきた。女子高生の方はボヘーツと尻を突き上げているだけだが、サラリーマンの動きが早くなってきた。

茂みを揺らしながら男は奇声をあげた。そしてバツと物陰から体を躍らせる。

「お前ら、そこで何をしている!」

驚いてサラリーマンが女子高生から離れる。

「わわわ、ひ、人がいたなんて……!」

サラリーマンは足をばたつかせると、地面においてあつた鞄を担いだ。回れ右をし、ダッシュで立ち去る。

やつた! 男がガツツポーズを取ろうとしたその時だ。

「ちょっと待ちなつ」

尻を突き出していたはずの女子高生が、次の瞬間、サラリーマンの首根っこを掴んだ。ぐえつ、と変な音を発しながら、サラリーマンが大地にひれ伏す。

予想外の自体に、男は思わず後ずさった。だが、「あんたもだよつ」と罵声を飛ばされ、身じろぐ。

「あんた、何してんの?」

怖いくらいに冷静な女子高生の視線が男を震わせる。まるで蛇に睨まれたキューバヒメガエル（世界最小の蛙）。

「い、いやその、ちよ、のぞき、のぞいてましたすみませんごめんなさい……」

男は全身を恐怖で震わした。

「ふうん」

女子高生はそういうと、凍てついた瞳で男を撫で回しながらサラリーマンの首根っこを掴み、今度は立ち上がらせた。

そして、何故だか樹に手をつき、再び尻を突き出した。

「ちようどこいや、あんた見ててよ」

「へ?」

「あたし見られてる方が興奮すんの!」

せりあまでの愛想のなせびへや。それから男は、世界で最も~~最も~~に謹そんを聞いたといつ。

さて、その翌日。

公園の中にあるダンボールハウスもある男の姿も無かつた。
そのかわり、公園の前にある「駐車禁止！」の看板にバツテング
つき、「注射禁止！」という落書きがあつたそつな……。

(後書き)

2007年執筆

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3979j/>

注射禁止

2010年12月19日01時55分発行